



東日本大震災被災者の精神健康を守るために

その他のタイトル	In order to protect The Great East Japan Earthquake disaster victim's mental health
著者	金子 信也
雑誌名	社会安全学研究 = Safety science review
巻	2
ページ	40-41
発行年	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018551

東日本大震災被災者の精神健康を守るために

In order to protect The Great East Japan Earthquake disaster
victim's mental health

関西大学 社会安全学部

金子 信也

Faculty of Safety Science, Kansai University

Shin-ya KANEKO

マグニチュード9.0、1000年に一度といわれる未曾有の東日本大震災が発生し、多くの人命が失われたのみならず、その被害は生存者の生活全般に及んでいる。

7月7日時点で死者が15865人、行方不明者は7016人で、そのほとんどは津波によるものであった^[1]。

今回の東日本大震災による津波の浸水域は、面積にして560平方キロメートルにまで及び、日本の経済損失は少なくとも、阪神淡路大震災時の2倍、額にして20兆円規模に上るとみられる。

今回の大震災はその規模は言うまでもなく、「複合災害」という点でも未曾有の災害となってしまった。大地震、大津波、そして原発事故。まさに天災と人災の「複合」である^[2]。

福島県双葉郡の大熊町と双葉町にまたがる地域に所在する福島第一原子力発電所は東京電力の施設であり、戦後、原子力技術開発をしばらく禁止され、アメリカから技術を導入せざるを得なかったという背景を有するが、本年3月11日、東日本大震災の余波から生じた事故は、その深刻さゆえに国際的な注目を集めることとなった。

事故から8カ月が経過した11月12日、政府と東京電力は、福島第一原発の敷地内を事故後初めて報道陣に公開した^[3]。周囲には、がれき撤去のための大型クレーンが並ぶも、原子炉建屋の状況は現在も尚、壁と屋根が吹き飛び、鉄骨だけ、という無残な姿のままにある。この類を見ない大災害から復興するにあたり、私たちはいかにここから立ち上がっていくことが出来るか。その知恵を過去の災害における先行研究に策を求め、被害拡大の阻止を試みる事が求められるものと考える。

1995年1月に発生した阪神淡路大震災は、戦後わが国で起こった最も被害の大きな災害であり、1959年9月の伊勢湾台風以来、実に36年振りに死者数1000人を超えた大災害であったこともあり、当時、被災者への対応についての情報が極端に不足していたが、そのひとつとして外傷後ストレス障害（PTSD）が挙げられた^[4]。

予期せぬ地震や津波といった自然災害に見舞われたり、人災あるいは事件、事故に巻き込まれてしまった被害直後に体験することとして急性ストレス障害（ASD）があるが、このような状態が長期にわたり継続し、日常生活を送ることが困難な症状が外傷後ストレス障害、いわゆる

る PTSD といった深刻な状態である。この場合、外傷体験の記憶に苦しめられるがゆえに、無理にそこから逃れようとする意識が日常生活を送ることを困難にしてしまう。その際の特徴的な現象としてフラッシュバックというものが挙げられるが、これは不意に外傷体験に巻き込まれ、且つ把握が困難な状態を指す。

外傷体験の記憶というものは、非常に歪んだ記憶を抱えることになり、抑圧され、潜在化しやすい。このため精神健康を回復する過程では、安全が確保された環境下において、記憶を活性化させ、恐れを弱め、切り離していくことが必要となる。そして時間の経過とともにその出来事に対する肯定的な意味づけや、小さなものとして客観視、あるいは自分の世界をより重要視することで乗り越えることができるようになる。

災害がもたらす精神的被害は多面的である。一命は取り留めたものの身体的後遺症による苦痛。また、人であれ物であれ、街並みや文化、生活の息吹も含めた故郷そのもの等、奪われた対象に対する愛情、愛着が強ければ強いほど、残された者の悲しみ、苦しみは計り知れない。しかしこれら大変な重荷を背負って尚、彼らには厳しい現実がのしかかる。日々の生活が待たなしであるからだ。5月の段階で、この震災により20万人程度の失業が生じているとの推計がなされた^[5]。被災失業者が生活を立て直していく上で仕事からの収入は重要な命綱であるが、震災による失業は、この命綱を切られるようなもの、絶望の淵に立たされることを意味する^[6]。

6月、福島第一原発の事故のため、牛を処分して廃業した福島県相馬市の酪農家男性が自殺した。この男性は周囲に「避難区域ではないため、補償はないだろう」、「原発ですべてを失った」と漏らしていたという^[7]。11月29日、政府は福島県内2地区で収穫された今年産の米の出荷停止を県知事に指示した。本災害が及ぼし続ける影響は計り知れない。

私自身、当日、福島で震災を経験した被災者である。実家も被害を受け、11月末現在も尚、屋根瓦や壁の修繕待ちという状況である。多くの被災者が抱える、やり場のない悲しみ、怒り、苦しみの幾許かを解する者として、共に復興への道を歩みたい。

参考文献

- [1] <http://www.fdma.go.jp/bn/higaihou/pdf/jishin/131.pdf> (2011年11月29日確認)
- [2] 水野倫之, 山崎淑行, 藤原淳登 (2011). 緊急解説! 福島第一原発と放射線 NHK 出版 pp3.
- [3] <http://www.asahi.com/national/update/1112/TKY20111120447.html> (2011年11月29日確認)
- [4] 河田恵昭 (2008). これからの防災・減災がわかる本 岩波書店 pp173.
- [5] <http://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/report/other/pdf/5491.pdf> (2011年11月29日確認)
- [6] 永松伸吾 (2011). キャッシュ・フォー・ワーク 岩波書店 pp3.
- [7] <http://www.yomiuri.co.jp/feature/20110316-866921/news/20110614-OYT1T00091.htm> (2011年11月29日確認)